

研究班番号【79】

堅苦しい英語にサヨナラ！ ～現代の英語教育をより良いものにするには～

英語班：藤本 眞子、有村 優花、橋本 結月、毛利 優亜

Abstract

The purpose of this study is to reveal if we really can't acquire everyday English in English education in Japan and to present English education in a new era. By the questionnaire targeting students in Japan and foreign countries, we discovered that students in Japan tend to use English with clear sentence patterns. Particularly, the tendency is more seen in students who have backgrounds in liberal arts. Therefore it seems to be difficult for us to acquire daily English because we learn English which focuses on passing exams in Japan. We suggest improving English education in a new era by studying in English, using media and Information and Communication Technology or ICT for short effectively. For example, doing presentations with Microsoft PowerPoint, communicating in English in a class and using a textbook which is almost entirely-written in English.

要約

本研究の目的は日本の英語教育では本当に日常英語が身につかないのかを明らかにし、新たな教育法を提案することである。日本と外国の学生を対象にしたアンケートでの実験により、日本の学生はより文型が明確な英語を使う傾向にあり、特にその傾向は理系に比べて英語の授業が多い文系に強くみられることがわかった。したがって我々は日本では文法を重視した受験のための英語を教えているため、日本の英語教育では日常英語は身につくことが難しく結論づけた。我々は、英語での調べ学習、パワーポイントでの発表などのICTやメディアの有効活用、英語でのコミュニケーションをより多く授業に取り入れる、教科書中の日本語を減らすなどの授業の改善を提案する。

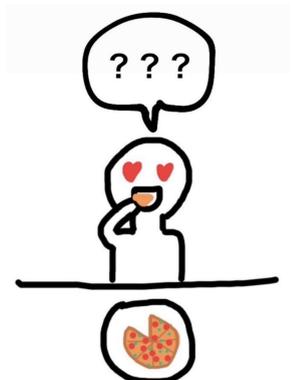
1. はじめに

学校で英語を学んでいるが、いざ話そうと思うと言葉が出ない。このような経験から、私たちは日本の英語教育には日常英語を身につけるといふ点で何か足りないと感じた。本研究では、日本の英語教育だけでは本当に日常英語が身につかないのかを外国の英語教育と比べて検証し、新たな教育法を提案する。なお、ここでの受験英語とは、大学受験に対応できるような文型が明確な英語であり、日常英語とは、ネイティブが日常的に用いるような文型が明確でないだけの英語のことである。

2. 研究手法

日本と外国の英語を比較し、日本人が使う日常英語の実情について検証する。
《調査》

高津高校76期生(文系/理系)と外国の学生を対象に、日本語版と英語版のアンケートを作成し実施した。ただし、アンケートの内容はどちらも同じである。アンケートの内容は、右のようなイラストや4コマを見て、ふきだしに合う英文を回答してもらうというものである。設問は、①美味しいものを食べている時/②(外見が)素敵な人を見た時/③友達を遊びに誘う時/④運動会で仲間を応援する時/⑤相手の服装を褒める時の5つの場合である。



3. 結果

〈日本語版/高津高校76期生対象〉

ほとんどの場合で文系はSVOなどの文型が明確な文(This is yummy.など)の回答が多く、理

系は単語のみ(yummyなど)の回答が多かった。また、④運動会で仲間を応援する時 という場面においては文系・理系ともにほとんどの回答が単語のみ(fight!など)だった。

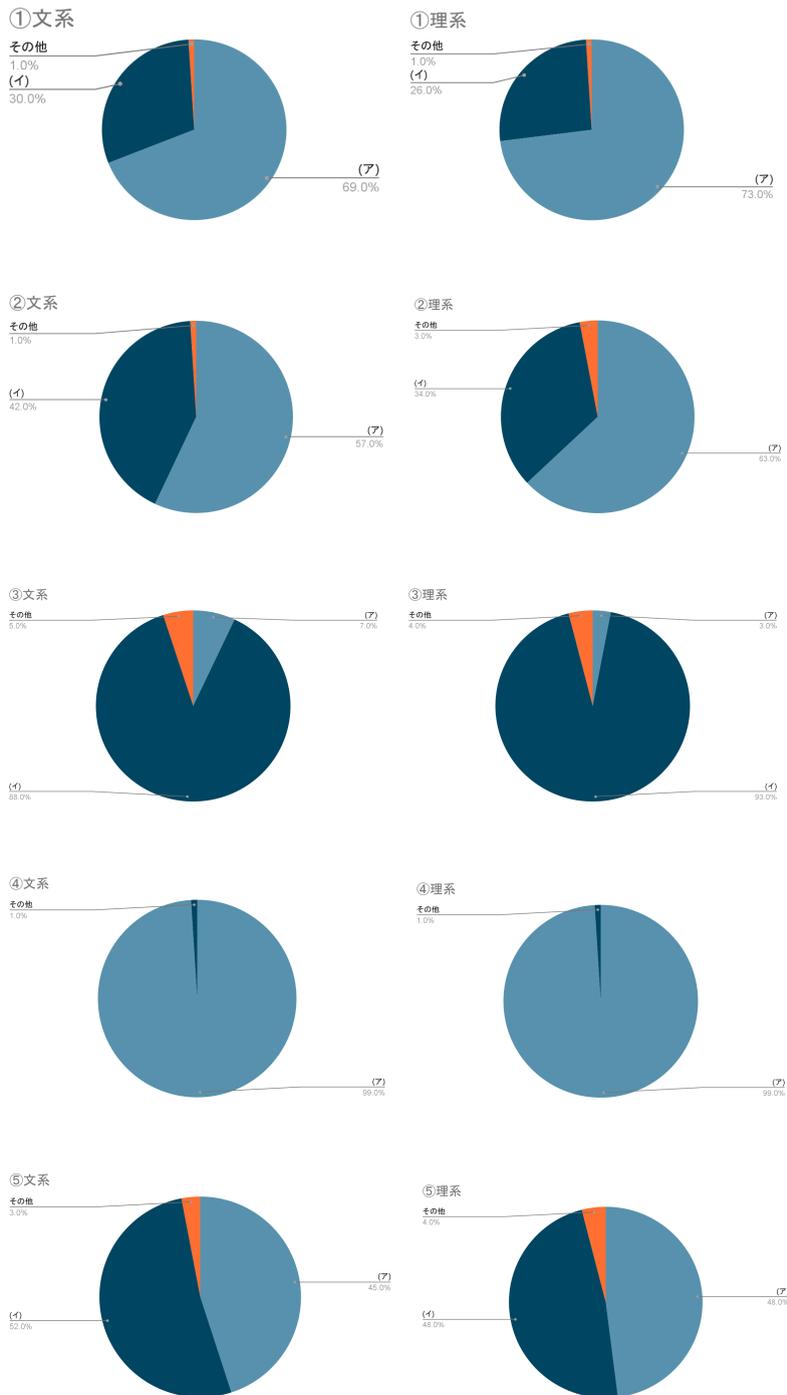
〈英語版/外国の学生対象〉

SVOなどの文型が明確でない文(This yummy.など)の回答が多かった。また、日本の英語の授業では習わないような単語(bussinなど)を使う回答が見られた。

〈高津高校76期生文系/理系別結果〉

※丸数字→設問を表す(2. 研究手法参照)

※(ア)→単語のみ (イ)→SVOが明確な文



4. 考察

文系は理系よりも英語の授業が多いため、より文型がしっかりした文章になるのではないかと考えた。日本の学生よりも外国の学生が文型が明確でない文で回答していることより、日本の授業は文型が明確である受験英語を教えているのではないかと考えた。また、④運動会で仲間を応援する時のみ文系理系ともにほとんどが単語のみの回答だったのは、fightという単語が日本でもそのままカタカナ語として使われているからという理由と、応援する時は文型を頭で考えている間もなくそのまま思ったことを口にするからという理由が考えられる。これらのことより、日常英語が身につく教育のためにはコミュニケーションを重視する、母国語がほとんど使われない教科書を使用する、小学校から簡単な文法を学ぶことで中学校で受験英語を学ぶとともに日常英語を学ぶ機会を増やすことなどが必要だと考えた。

5. 結論

日本の英語教育では文法を重視した受験のための英語を教えているため、大学受験というものがあつた限り現在の日本の英語教育だけでは日常英語は身につくことが難しいといえる。我々が今すぐに行うこととして、授業内での英語のコミュニケーションを増やす、オンラインでの外国の生徒との交流や英語での調べ学習、英語でのパワーポイントの発表などクロームブックなどのICTやメディアを有効活用することが挙げられる。これから時間をかけて取り入れられることとしては、今よりも日本語が少ない教科書にするなどの改善を行うことを提案する。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

Kevin's English Room (2021)『その英語、本当にあつてる?ネイティブならこう答えます』辻伸幸(2021)『韓国の小学校英語教育から日本が学ぶべき視点』